

ISBN4-903353-01-X

二松学舎大学21世紀COEプログラム  
「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

2005年国際シンポジウム報告

## 世界における日本漢文学研究の現状と課題

と き 2005年9月3日(土)・4日(日)

ところ 二松学舎大学 九段キャンパス 中洲記念講堂

二松学舎大学21世紀COEプログラム

目 次

まえがき	COE拠点リーダー	高山 節也	1
主催者挨拶	二松学舎大学長	今西 幹一	3
記念講演			
「日本の漢詩 一和習と和風一」		石川 忠久	5
報告1：ヨーロッパにおける日本漢文学研究の現状と課題		W・J・ボート	29
報告2：英語圏における日本漢文学研究の現状と課題		ロバート・ボーゲン	61
報告3：ベトナムにおける日本漢文学研究の現状と課題		グエン・チ・オワイン	79
報告4：韓国における日本漢文学研究の現状と課題		沈 慶 昊	91
報告5：中国における日本漢文学研究の現状と課題		王 勇	103
報告6：日本における日本漢文学研究の現状と課題		後藤 昭雄	113
日程			119

本報告書のボートは、本プログラムの「世界における日本漢文学研究の現状と課題」に関して、各地域における現状と課題を中心に語られたが、欧米地域と東洋地域ではおのずから差違がみられた点でもある。ボート氏、ボーゲン氏の報告では、欧米においては歴史的には日本語の習得を中心とした時期から研究への流れにあきあき、言語的制約や、より内海に突っ込んだ通商の必要にたつことの必要性など、クワイアすべき課題も多いことが述べられた。ボーゲン氏も東洋圏における研究者のポリリテラシーや創作者意識の発想が、広範なテキスト群を必要とする点や、ボーゲン氏のアメリカにおける古典よりは現代への研究関心の強弱の指摘は、それぞれの地域の特徴として興味深い指摘であったといえよう。

## まえがき

2005年9月3日（土）から4日（日）の二日間にわたって、本学九段キャンパスの中洲記念講堂で国際シンポジウム「世界における日本漢文学研究の現状と課題」が開催された。実際は、その前日の2日（金）に招聘者・コメンテーターを含めてのミーティングと歓迎会がアルカディア市ヶ谷（私学会館）で開かれ、終了後の5日（月）にはCOE海外拠点リーダー会議が九段キャンパス会議室で行われたので、実質としては四日間の会期であった。

今回のシンポジウムは、昨年のシンポジウムに続く2回目であったが、前回よりは規模も内容も一層充実拡大され、今後の世界的研究拠点としての本学の位置づけと、世界に存在する日本漢文研究者の結集、さらにはそれらのネットワーク作りに重要な意味を持つシンポジウムであった。

昨年度から実施された公開講演やその他の情報収集の結果、今回は報告者として、オランダ；ライデン大学のウィレム・ヤン・ボート氏、アメリカ；カリフォルニア大学のロバート・ボーゲン氏、ヴェトナム；漢喃研究所のグエン・チ・オワイン氏、韓国；高麗大学の沈慶昊氏、中国；浙江工商大学の王勇氏の六名を招聘し、日本からは和漢比較文学会代表理事の大阪大学の後藤昭雄氏を招聘して、諸報告の総括と日本の現状についての報告を依頼した。また、後藤氏以外のそれぞれの報告には、コメンテーターとして、中野三敏氏、石塚晴通氏、王宝平氏、小川晴久氏、ウィリー・F・ヴァンドゥワラ氏があたった。

各報告者のレポートは、本プログラムの「世界における日本漢文学研究の現状と課題」に則って、各地域における現状と課題を中心に語られたが、欧米地域と東洋地域ではおのずから差異がみえたようでもある。ボート氏・ボーゲン氏の報告では、欧米においては歴史的には日本文献の翻訳を中心とした時期から研究への流れにあるものの、言語的制約や、より内面に突っ込んだ理解の次元にたつことの必要性など、クリアすべき課題も多いことが述べられた。ボート氏による欧州圏における研究者のオリジナリティや創立者重視の発想が、広範なテキスト発掘の障碍となりうることや、ボーゲン氏のアメリカにおける古典よりは現代への研究興味の推移の指摘は、それぞれの地域の特質として興味深い指摘であったといえよう。

東洋地域では、オワイン氏はヴェトナムにおける日本漢文研究はなお初歩の状態、古典文献の翻訳と校訂によるテキスト開発などによって、今後の発展が期待されることを述べられたが、これは海外拠点リーダー会議に出席されたサオワラック氏によるタイの現状報告における、漢文そのものが研究組織においてほとんど扱われないという状況説明と類似するものであった。韓国の沈慶昊氏の報告では、江戸期から現代における両国漢学の接点について六つの視点から概観したうえで、現状における日本漢学への取り組みと今後の展望が述べられた。日本漢学そのものへの興味は現状ではなお低く、翻訳なども今後の課題といえる。ただ上古以来の両国の関係からいえば、人物交流と書籍流通はなおざりにできない分野であり、特に日本における朝鮮本の翻刻などについては、今後重要な研究テーマとなるであろうとの指摘があった。また中国の王勇氏は、日中両国における文献の流通の歴史に触れた上で、唐本の日本復刻を「和刻本」という表現の曖昧さを指摘する一方、日本漢文文献を中国で翻刻するものについて今後おおいに注目する必要があることを述べ、これらを「華刻本」と命名して、書籍史における新たなスタイルとして認知することを提案した。

最後に後藤氏の総括と報告において、特に和漢比較文学会の活動を中心に、日本漢文学研究の必要性の認識と、それにともなう日本漢文資料の翻刻の増加について触れ、我が国においてこうした研究基盤の整備が、今後の研究の進展に多大の寄与をなすものであることを指摘した。さらに総括として非漢字圏における翻訳の比重の高さと、漢字圏の書物の物としての流通への視点の重視において、日本漢文学は広く漢文文献として取り扱う必要があるとの指摘がなされた。

世界における日本漢文学の現状認識と今後の課題を検討する上で、今回得られたこれらの知見は、具体的であり且つ即効性を孕む貴重なものであったと思う。ただいずれの報告者もとまどいを見せたのが、日本漢文学という言葉の内実であった。これを今後どのように再認識し、さらに新たな発想をそこに加味してプログラムを統合していく中心線とするか、メンバー一同に課された課題であるといえよう。

COE拠点リーダー 高山節也